

変わる日本の「暮らし」と「まち」

人の輪と絆を育てる
団地内のコミュニティファーム

福岡県宗像市
団地の農場 日の里ファーム
(2016年・平成28年)

阿部民子

text by Taniko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

2017年に世界遺産になった宗像大社で有名な歴史ある福岡県宗像市。博多と小倉のほぼ中間に位置し、両市のベッドタウンとして発展してきた。その大きな基盤となったのが、JR鹿児島本線東郷駅前広がる日の里団地だ。建設されたのは、日本の高度成長期である昭和40年代から60年代にかけて。総戸数は1200戸を超える九州でも有数の団地だ。

2年前、その一角に巨大なビニールハウスが目見えた。名付けて「日の里ファーム」。中に入

ると、腰の高さほどの栽培ベッドに、青々としたチンゲン菜や真つ赤な実をつけたミニトマト、黄色い花をつけた落花生の苗などが並び、壮観だ。

朝9時、ハウスの戸を開けて、三々五々、人が集まってくる。和やかに挨拶を交わして野菜の様子を眺めたり、収穫したりする様子は、「団地」の中とは思えない、ユニークな光景だ。

70代になる波留啓子さんは「うちには、このすぐ前なの。好奇心が強いから、目の前にこのハウスが

日野菜が育っていくの見るのは楽しいし、何よりおいしいの」と採れたてのミニトマトをくださった。口の中で皮がパリッと弾け、甘みが凝縮されておいしい！

隣で作業をしていた60代の酒井優さんは「野菜を育てたことはなかったけど、八百屋さんに行っても『この値段でいいのかなあ』なんて、野菜を見る目が変わったね。ここができるまでは自宅にいがちだったけど、いまは毎朝9時に来て作業をして、そのあとみんなでコーヒーを飲むのが日課。毎日の生活のリズムができたし、健康にもいいね」と話してくれた。

生きがいとコミュニティを形成

日の里団地を管理しているURでは、現在、子どもから高齢者までさまざまな世代が生き生きと暮らし続けられるまちづくりを進めている。

「このファームもその一環として、2016年にスタートしました。使われなくなっていた広場を活用して、生きがいづくりや多世代間のコミュニティを形成できる場ができないかと考え、『食』と

『農』をテーマに、東レ建設さんと連携してこのファームをつくりました」と話すのは、UR九州支社の小川和朗だ。

採用された東レ建設の農業施設「トレファーム」は、栽培地が高床式になっていて、高齢者や車椅子の人でも腰を曲げずに作業できるのが大きな特徴だ。土の代わりに砂を使っているので、農機具を使わずに砂遊び感覚で始められる。水や液肥は自動灌水装置で供給されるので、初心者でも失敗しない、などさまざまなメリットがある。

日の里ファームでは、団地で暮らす方を中心に会員を募集。ハウス内には、会員がファームでのお手伝いをする代わりに無料で好きな野菜を育てる区画を持つことができるエリアがある。会員は原則1日1〜2時間ほど、スタッフから栽培のノウハウを学びながら野菜づくりを楽しむ。また販売用野菜を栽培するエリアもある。収穫した野菜は毎週日曜日に団地内で開かれる朝市や、東郷駅前にあるマルシェ(Marché)のさとや直売所で販売。地元小学校の給食に

収穫した野菜を提供するなど、地



ハウスの中では、みんな笑顔でいっぱいになる。

域との繋がりも生まれている。

「ただ育てるのではなく、採れたものを食べたり、販売することが、生きがいにつながれば」と語るのは、東日本大震災の復興事業を経て昨年7月に赴任したURの杉田典夫だ。「震災復興でのバラバラになったコミュニティ再生の経験を活かしつつ、団地再生では従来からあるコミュニティの再活性化が課題」と新たな業務に取り組んでいる。

多世代が繋がる場に

日の里ファームに常駐し、野菜の栽培指導や菜園管理、コミュニティ形成を行っているのが、日本総合住生活の榊原慎也さん。穏やかな笑顔で会員はもちろん、子どもたちからも大人気。放課後には多くの子どもたちが遊びに訪れ、取材当日も会員さんと一緒につくった七夕飾りが目を引いた。

「現在の会員さんは64名。年代的には60代の方が多く、本格的な農業というより、みなさんが楽しく来て横のつながりができる場になるように活動しています」。毎月1回、会員交流会も開催。6月は

ファームで採れた山盛りの枝豆が出て大盛況だったという。

ファームは団地の新しい魅力にもつながっている。今年の3月に日の里団地に入居した60代の初田哲男さんは「家探しをしているときに、ウェブでこのファームのことを知り、面白そうだと転居を決めました。昔からおられる方から、地域のことや病院情報などいろいろ教えてもらったり、いいもんですよ」と笑顔で語る。

「この団地ができて50年。高齢者が増えて出不精になるし、近所づきあいも減ってきています。でも、こういう場所があると、みんながワイワイやって知り合いも増える。すごく貴重ですよ」と、開設以来の会員という70代の土井良夫さんに聞かれる祭り日には、野菜の販売や子供向けゲームも企画しているとか。1つのファームを中心に、多世代と地域を繋ぐ人の輪と絆が広がっている。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社